

第6章 上之国館跡に所在する歴史的建造物【第30図参照】

史跡を構成する重要な要素として歴史的建造物がある。洲崎館跡の砂丘上には安永9年(1780)建築の砂館神社本殿が建っている。

勝山館跡の指定地内には、北流する宮の沢川の右岸に天保年間建築と伝わる旧笹浪家住宅(主屋)が建ち、左岸には元禄12年(1699)造替とされる上ノ國八幡宮本殿が覆屋の中で風雪を凌ぎ、その参道西側には、嘉永元年(1848)建築の旧笹浪家附属米・文庫蔵と、明治18年(1885)落成の旧笹浪家住宅(附属土蔵)が軒を連ねている。

社地の脇を、藩主の社参や代参に用いた通称「代参道路」が勝山館跡に向かって延びているが、代参道路の西側を流下する寺の沢川を挟んで浄土宗の古刹上國寺の境内地が拡がり、宝暦8年(1758)建築と伝わる上國寺本堂の棟が高く天空に聳えている。

このように勝山館跡の直下、宮の沢・寺の沢両河川の下流部一帯は江戸初期から明治初期にかけての歴史的建造物が建ち並び、独特の情趣を醸し出している。

1 砂館神社本殿(道指定有形文化財)

コシャマインの戦いに辛勝し、天河の洲崎の館に居した武田信廣が、寛正3年(1462)に館の北に毘沙門堂を創立したのが縁起という。旧称を「毘沙門天王社」または「毘沙門堂」といい、本道の社寺の中で、古文獻に記された最初のもので、この社の縁起は松前諸社のうちでもっとも名高く、諸書に記されている。毘沙門天は「多聞天」とも云い、北方鎮護の神である。

その後、蠣崎家4世季廣が、勝山城代基廣(季廣の従兄弟)の陰謀露見は毘沙門天の加護によるとして、天文18年(1549)に新堂を造営し、冥慮を崇め奉ったことが『新羅之記録』に見える。

安永7年(1778)12月に社殿は焼亡し、女奈呂長(めなむらのおさ)は失火の責めを怖れて自殺した。当時の藩主道廣はただちに造営に着手し、翌々安永9年6月、現在地に本殿並びに拝殿が落成した。文久2年(1862)にも雪のため拝殿が潰れたが、藩命によりただちに工事に着手、5月には新拝殿が落成している。

藩政期には、館神八幡宮(現在の上ノ國八幡宮)、医王山薬師堂(現在の夷王山神社)とともに上ノ国三社と称された。上ノ国三社のうち、この社だけが古くから藩費による月次の神楽が奉納されており、藩主の社参や代参も三社のうち、まずこの社に参詣するのを例とした。明治4年(1871)神仏分離の際に砂館神社と改称した。

現本殿は神明造から発展した形式の一間社流造で、構造は切妻造・平入、屋根は銅板葺である。江戸中期建築の共通点として、その意匠は技法的にかならずしも出色とは認められないが、その沿革、建築年代及び保存状態の良好さから、歴史的に価値の高いものと評価されている。

砂館神社の現本殿は、覆屋に納められず風雪に晒されているため、傷みが目立つようになってきている。洲崎館跡との関わりも深い重要な古建築であることから、保存修理を行う必要がある。

2 上ノ國八幡宮本殿(町指定有形文化財)

当初は勝山館跡の第二平坦面(主郭)の最奥部のもっとも高いところにあって、「館神」もしくは「館神八幡宮」と呼ばれていた。

八幡宮の創立について、『福山秘府』の文明5年条(1473)は「松前年代記曰、是歳、八幡宮を上国館上に造立、館神と称す。」と記し、文明5年造立を伝える。

現在の本殿は、本殿の床上奥に置かれた壇の上板裏面の墨書から明和7年(1770)造替とされていたが、調査の結果、墨書は本殿修復のために村人が寄進した材料を記したものではなく、本殿覆屋の記録であることが分かった。さらに、本殿の細部意匠等から、宝暦8年(1758)建立とされる上國寺本堂と同時期か、やや遡ることが推測されたため、現本殿の造営年代は、『福山秘府』の「元禄12卯年(1699)造替」に合致するものと結論づけられている(巻末「資料編」の『上ノ國八幡宮本殿調査報告書』参照)。

明治9年(1876)、八幡宮の社格は郷社となり、それに伴って勝山館の最奥部から現在地に遷され、大蔵鯉伝説で知られる秀海法印を祀る若宮社を合祀した。また、明治4年の神仏混淆禁止により取り壊しを申

し付けられた江差の金比羅古宮を上ノ国の村方一同が江差の正覚院より買い入れ、拝殿として普請、明治10年10月には落成したと推察される。なお、拝殿は平成20年地元有志の寄附を募って改築されている。

八幡宮の現本殿は、覆屋の中に納められているとはいえ、造替後300年有余を経過し、傷みも激しくなっている。勝山館との関わり深く、築造年代の傍証となる重要な古建築であることから、保存修理を行う必要がある。

3 医王山薬師堂（夷王山神社）

「夷王山神社」もまた上ノ国三社の一つとして知られる。いまも勝山館跡の指定地内の夷王山頂上の三方に築かれた土塁内に社殿が建つ。藩主の社参や代参はこの社を最後に参詣するを常例としていた。

寛政元年（1789）、大田権現参詣の帰途、上國寺に逗留していた菅江真澄は、「医王山の頂にのぼれば、さゝやかなの鳥居あり。ちいさき祠の中にある石のひさごかたの面に、三のみかたしろあり。そが中は薬師ぶち、左に、みぐし十あまり一つのぼさち、右には、ほこつるぎをもたまへる地藏尊を、ひとつにつくりそへて、この、みつのほとけのあはひに、「医王山頭陀寺、永禄七年（1564）三月」とのみ、けちのこりたり。むかしの寺あとならんことをしられ、花見が館の栄えたる、いにしへを偲ぶ。」（『蝦夷喧辞弁』）と書き残し、寺跡が残っていたことを伝える。

新田千里編の『松前家記』（明治13年）は「後世夷王を誤り医王に作る。」としたが、『福山秘府』は由緒や造営の年号等是不分明としながらも、「医王山薬師堂」と書き、延宝2寅年（1674）と元禄五申年（1692）に上ノ国村中によって造替されたと記録する。

また、安政5午年（1858）の記録を書き写した^①笹浪兵太郎の『笹浪氏諸留』は、本社の規模は間口三尺奥行三尺で、鳥居が建ち、「開基永禄元午年（1558）奉造立」と記し、「医王山」と書く。天保13年（1842）の『御旧国上ノ国江御代参被仰付候日記』（巻末「資料編」参照）も同じく「医王山」とするので、創立当初は「医王山」であったのはほぼまちがいない。河野常吉氏が『北海道史蹟名勝天然紀念物調査報告書』に説いたところでもある。

社名を夷王山神社、祭神を武田信廣としたのは、明治26年（1893）に子爵松前修広がときの北海道長官に願い出て許された、と『上ノ国村史』は記しているので、明治の国家神道の影響を受けての改称、祭神の変更と考えられる。

4 上國寺本堂（重要文化財）

上國寺は、初代松前藩主・松前慶廣が始祖の武田信廣の菩提を弔うために開創したと伝わる古刹である。開創の時期は詳らかではないが、江戸時代後期の『蝦夷喧辞弁』や『西蝦夷日記』は永禄年間（1558～70）とする。当初は真言宗に属していたが、江戸中期の延宝年間に浄土宗に改宗し、現在に至っている。寺地は、勝山館跡指定地内の夷王山北東山麓の、寺の沢川の河道を切り替え造成された傾斜地に設けられており、建物は桁行11.3m、梁間13.1mの入母屋造で、海に向かって北面している。

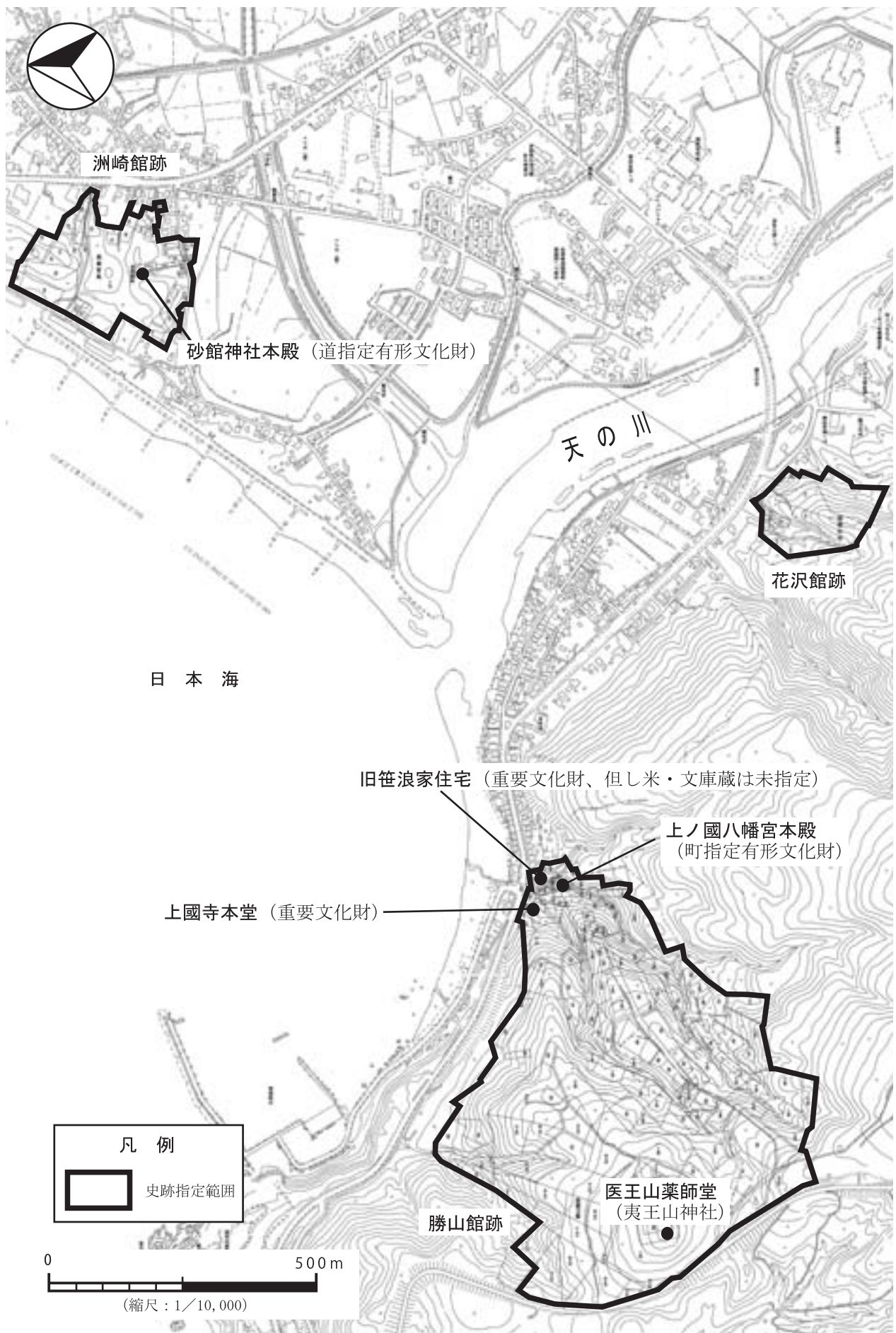
本堂は、各柱筋に虹梁を多用するなど浄土宗本堂として発展した形式をよくあらわし、正面の縁を内部に取り込み、また窓等の開口部を少なくするなど寒冷地の工夫もみられ、虹梁の絵様等の細部意匠にも特色がある。内陣天井の支輪には「寶曆八寅年（1758）」の墨書があり、細部の様式からこの時の建立で、北海道における18世紀に遡る数少ない仏堂建築として貴重であるとされ、平成5年に重要文化財に指定された。平成20年12月から復元的修理（半解体修理）工事に着手しているところである。

建築当初からの改修・補修履歴について痕跡調査を行った結果、現在の建物は宝暦8年（1758）に建築され、その後、明和6年（1769）に本堂の内部に欄間、彩色などが整えられ、昭和4年（1929）に土台の入替と屋根の葺き替えなどの大改修が行われ、昭和25年頃にこけら屋根が鉄板葺に改変されたことが判明した。

以上の履歴から、上國寺本堂の隆盛は明和6年（1769）頃と判断し、復原年代を当該年として保存修理を進めている。竣功は平成23年10月末の予定である。

5 旧笹浪家住宅（重要文化財）

旧笹浪家住宅（主屋）は、天保9年（1838）に没した^②能登屋笹浪家の5代目久右衛門こと伝治郎が建



第30図 史跡上之國館跡（洲崎館跡・勝山館跡）歴史的建造物 位置図

てたと伝わる。安政4年（1857）に家の土台替え、翌5年に屋根の葺替えを行ったことを記した『家督普請扣』（附指定）が残っており、19世紀前半、北海道最古の民家建築と言われている。また、北海道の日本海沿岸にいまも残るニシン番屋建築の原型ともいわれている。

初代久右衛門は能登国笹波村の出で、松前福山に渡ったのは享保年中（1716～1735）と伝わる。5代目伝治郎から4代にわたって久右衛門の通り名で、場所請負人竹屋（林）長左衛門のヨイチ場所において、明治初期まで二八取として出稼ぎをし、また浜名主（浜役）の一人としてヨイチ運上屋などへの訴願人にも名を連ねていたことが分かっている（『余市町史第1巻資料編1』）。

主屋は、桁行15.9m、梁間11.9mのやや規模の大きな住宅で、切妻造の屋根は、棟を北側の国道に平行に造っている。棟筋は梁間の中央よりも南寄りとし、北側は海に面する正面の軒を低くして北風に備えるのに対し、南の急傾斜地の崖に面する背面軒は高くして採光を考慮している。

屋根の葺材はヒバ沓で、沓が飛ばないように大風でも転ばぬ大石を置く。解体調査で、主屋の外壁の縦板壁の表面に、防寒効果を高めるため張り付けたと考えられるヒバの樹皮が残存していた。主屋の柱や梁など建築材の大部分もヒバと判明している。

附属土蔵は、扉内側の漆喰壁のへう書きから、明治16年（1883）に「立前（たてまえ）」が行われ、翌々年に新築落成したことが分かっている。土蔵は屋根を葺かず、表面を漆喰塗で仕上げているだけで、「サヤ」と呼ばれる覆屋の中に納められ、屋根の下地や土台の周りには白樺などの樹皮が使われている。

附属土蔵南側の土蔵は、平成4年に行った解体調査の結果、二室に仕切られた北室が文庫蔵、南室が米蔵と呼ばれ、北室の裏白戸に刻まれたへう書跡から嘉永元年（1848）9月6日築造と判明した。主屋に続く一連の建造物群の一棟として重要と評価されている。この土蔵の屋根の下地にも樺が使われているが、その上を漆喰塗で仕上げ、登梁を載せて小屋を組み、棧瓦を葺いた置屋根方式である。

旧笹浪家住宅（主屋及び附属土蔵）は、すでに重要文化財として保存修理工事を終え、供用が開始され積極的な公開活用がなされている。しかし、組立復原工事を終えている米・文庫蔵は重要文化財に値すると評価されているものの未指定である。